

有馬郡守護について

小林 基伸

はじめに

摂津国有馬郡は、南北朝から戦国時代を通じて分郡守護がおかれた地域である。摂津国の分郡守護については今谷明氏の研究があり、有馬郡の守護正員以下も復元されている⁽¹⁾。また、近年あいついで刊行された日本史辞典では、『新版日本史辞典』（一九九六年 角川書店）、『岩波日本史辞典』（一九九九年 岩波書店）、『日本歴史事典 四』（二〇〇一年 小学館）が有馬郡の守護表を載せている。各辞典の守護表は、いずれも今谷氏の研究を基本として若干の修正を加えたものであるが、相互に異同があつて一定しない。

今谷氏の研究以後、『兵庫県史』の史料編が刊行されて文書の検索が容易になり、最近では地元の高田義久氏が赤松有馬氏関係の史料を集めた『有馬郡主 赤松有馬氏年譜』⁽²⁾を発表され、さらに『三田市史』の古代・中世資料編⁽³⁾（以下、『三田市史』と記す）も刊行された。筆者も以前不十分ながら一六世紀の赤松有馬氏の嫡流について検討を加えたことがあるが⁽⁴⁾、あらためてこれらの史料集を通覧すると、今谷氏の研究をはじめ各辞典の守護表にはいくつか修正を要する点があり、追加すべき守護正員も存在する。すでに高田氏が史料を列挙するなかで実質的に修正案を提示されており、『三田市史』でも個別的な指摘がなされているが、両書に未収録の関連史料も若干あり、また考えを異にする箇所もある。そこで、これらの先行研究を参考にしつつ、赤松義祐以降の有馬郡守護に関するいくつかの問題に検討を加え、あら

ためて歴代守護正員の整理を試みることにしたい。

一 赤松出羽守則友の在職について

有馬郡守護は、嘉慶元年（一三八七）一二月から⁽⁵⁾応永元年（一三九四）五月までの間に赤松義則から弟の出羽守義祐に交代した。⁽⁶⁾その後、義祐の子孫が代々有馬郡守護に補任され、義祐に始まる一族は赤松有馬氏と呼ばれる。なお、赤松有馬氏は通常三田城を本拠にしたと言われているが、文献上確かな根拠はなく、考古学的にも一六世紀前半以前の材料はえられていないようである。⁽⁷⁾

応永一六年、義祐は、有馬郡中荘内の田地二町を清水寺に寄進した。⁽⁸⁾これは、永徳三年（一三八三）、当時は有馬郡守護であった赤松義則が、南朝方に属して清水寺で敗死した赤松氏範父子の追善料田として寄進したもの⁽⁹⁾の再寄進である。この田地は、氏範の官途名にちなみ霜台田と呼ばれた。以後、ほぼ代替わりごとに再寄進がおこなわれており、それらの寄進状は有馬郡守護の変遷を考えるうえで重要な史料となる。

義祐は、応永二八年（一四二一）九月に死亡した。⁽¹⁰⁾今谷氏は次代の有馬郡守護として、『満済准后日記』応永三〇年正月七日に「舎弟赤松出羽守死去」とみえる赤松出羽守をあげ、それを『赤松大系図』の義祐の嫡男則友に比定する。いっぽう『日本歴史事典』は則友の父を赤松義則とする。

先の『満済准后日記』の文は、赤松左京大夫（満祐）に関する記事に続いており、文脈上は満祐の弟と考えるのが自然である。事実、『東寺二十一口方評定引付』応永二〇年九月二日条に「赤松禪門（義則）子息出羽守」とあり、それが「侍所当職（満祐）舎弟」である⁽¹¹⁾とみえる。さらに、応永一九年には將軍足利義持の供奉帶刀衆に赤松出羽守則友が知られる。したがって、応永三〇年に死去した赤松出羽守は、義則子息、満祐弟の則友であり、その点では『日本歴史事典』の記載が正しい。

問題は、この則友が有馬郡守護に補任されたかどうかである。今谷氏が赤松出羽守を有馬郡守護と判断したのは、出羽守が義祐の官途と同一であることによるようである。今谷氏が述べるように出羽守が義祐の子息であれば、父と同じ官途が与えられ、守護職も継承したと考

えることは可能であるが、義則の子息であれば官途の一致は決め手にならない。赤松則友の有馬守護職在職の積極的な徴証がない以上、則友の在職は認められないと考える。

二 赤松「持家」と教実

今谷氏は、応永三〇年の赤松出羽守の没後、義祐の子息赤松持家が家督を継承したとするが、根拠はあげていない。ついで、嘉吉元年（一四四一）一月に有馬郡守護の在職徴証がある赤松兵部少輔を、翌年同郡野鞍荘の代官職請文を提出した赤松教実に比定する。今谷氏は持家と教実を別人とみなしているようなのだが、記述はいささか混乱し、本文において持家の名で記述した内容が末尾の要約では教実のこととして示されるという齟齬を生じている。

このような混乱の原因は、持家という人物の存在自体のあいまいさに由来すると思われる。

赤松持家は、これまで赤松有馬氏当主の名としてほとんど何の疑いもなく叙述に用いられてきたが、高田氏も指摘されるとおり、管見のかぎり持家の名は系図以外にみあたらないのである。おそらく、多くの系図に「兵部少輔」の注記があるため、史料中の赤松兵部少輔が持家に比定され、それがそのまま通用してきたのであろう。しかし、当時の確かな史料から判明する赤松兵部少輔の実名は教実であり、事実、有馬氏の当主名を持家とするとあきらかな矛盾が生じる場合がある。たとえば、嘉吉の乱で赤松追討軍に加わった「赤松有馬」の名はこれまで持家とされてきた。乱後、赤松兵部少輔が恩賞として城山城で討死した龍門寺真操（赤松満祐弟）の旧領をえているから、「赤松有馬」がこのころ有馬郡守護であった赤松兵部少輔であることはまちがいない。ところが、翌年の『康富記』の記事などにより、兵部少輔の実名は教実でなければならないのである。

『有馬系図』（『続群書類従』第五輯下所収）では、持家に「一作教実」と注記がされている。この時期、足利義持からの一字拝領と思われる「持」を含む名の武将は多く、持家から教実への改名の可能性も考えられるものの、それが明確にならないかぎり、系図の持家は教実とするのが正しいということになろう。有馬氏当主赤松兵部少輔の実名は、教実に統一するのが史料に忠実だと思われるのである。

永享三年（一四三二）五月、細川持之、赤松満祐とともに赤松兵部少輔にも多田莊御家人を退治すべき旨幕府の命令が下された⁽¹⁷⁾。これが教実の在職をうかがわせる最初の徴証であるが、先述のとおり赤松則友の在職はなく、教実は応永二八年（一四二二）の義祐死去をうけて家督と守護職を継承したものであると思われる。

三 赤松元家・道衍・直祐

文安二年（一四四五）三月、赤松教実は、前年播磨に攻め入り、山名軍に敗れて有馬郡に逃がれてきた赤松満政に加担して細川勝元の丹波勢と戦った⁽¹⁸⁾。しかし、この合戦で大きな損害をうけた教実は、一転して満政父子を討った⁽¹⁹⁾。今谷氏は、康正元年（一四五五）における有馬氏当主上総介元家の存在をあげ、教実が文安二年四月に満政扶持の責任をとって引退し、元家が跡を継いだとされる。

教実は、宝徳二年（一四五〇）正月二日に他界した⁽²⁰⁾。二年後の享徳元年七月、元家は清水寺に霜台田を寄進している⁽²¹⁾。のちの道衍、則秀、澄則の例をみても、霜台田の寄進は代替わり後ほぼ二年以内におこなわれている（後述）。したがって、元家への家督継承は教実の死去によるものであり、それまで教実は守護職に在職していたと考えられる。

康正元年（一四五五）一二月、前年十一月に始まった赤松則尚の乱に加担した元家が遁世し、その跡は赤松治部少輔入道道衍に与えられた⁽²²⁾。翌年四月、道衍は清水寺に霜台田を寄進している⁽²³⁾。

道衍は、『大日本史料』の注記にしたがって『有馬系図』などにみえる治部少輔持彦に比定されるのが定説であり、『岩波日本史辞典』及び『日本歴史事典』も持彦の名で記載している。『有馬系図』によれば持彦は義祐の弟祐秀の子であり、義祐に始まる有馬氏とは別の流れということになる。ただし、系図によっては持彦を義祐の子とするものもあり、確定しない⁽²⁴⁾。元家の遁世と道衍の継職を伝える『斎藤基恒日記』には、「赤松有馬上総介元家」に続いて「同名治部少輔入道——（道）衍」⁽²⁵⁾とあり、「同名」が「赤松有馬」を指すのであれば、義祐の子孫であるほうが適合的ではある。

道衍は丹波国郡家莊（篠山市）⁽²⁶⁾を本領としており、篠山盆地を拠点のひとつとする一族らしい。しかし、道衍は子息弥次郎の出仕のため

郡家莊を売却しなければならぬほど困窮していた⁽²⁷⁾。むろん確実な根拠にはならないのだが、少なくとも教実・元家と続く赤松有馬氏嫡流とは異なる系統である可能性は高いように思われる。元家が反乱に加担したため、有馬郡守護職が別の系統に与えられたのであろう。道衍の有馬守護職在任は寛正六年（一四六五）八月まで確認され、翌文正元年二月、同閏二月には子息弥次郎の在職が認められる⁽²⁸⁾。

弥次郎の実名は、『斎藤親基日記』寛正六年八月一五日条に「赤松弥次郎直祐」とあることにより、直祐と判明する。したがって、文正元年段階の在職者を『日本歴史事典』が赤松元家とし、『新版日本史辞典』が「赤松某（豊則か）」とするのはいずれも誤りである。なお、赤松豊則は、文正元年以前に死亡している⁽²⁹⁾。

この後応仁二年（一四六八）十一月までの守護について、今谷氏、『日本歴史事典』、『新版日本史辞典』は文正元年段階と同一人物の在職とする。両辞典の比定人物名は異なるが、在職期間についてはともに今谷説にしたがったのであろう。それにたいし、『岩波日本史辞典』は応仁元年から応仁二年まで赤松元家の在職を載せる。

『岩波日本史辞典』は根拠を提示していないので推測するほかはないが、おそらく応仁元年正月に赦免された「赤松之在馬」⁽³⁰⁾と同二年一月に誅殺された「有馬上総」⁽³¹⁾とともに元家に比定し、赦免によって守護職を回復したと判断したのであろう。確かに応仁二年の「有馬上総」は元家と考えられるが、元家の幕府復帰は応仁元年正月以前であった形跡がある。すなわち、寛正期以降応仁の乱前頃の内容と考えられている⁽³²⁾『長祿二年以来申次記』（『群書類従』第二二輯所収）所載の御供衆に「赤松上総介元家 有馬事也」と見えているのである。元家の赦免を求める動きは寛正六年九月にあり、そのときは義政に退けられているから、復帰はそれ以降である。先述のとおり、寛正六年八月には道衍、翌文正元年閏二月には直祐が守護に在職しており、二人の名は『長祿二年以来申次記』にも外様衆として赤松治部少輔入道（道衍）、同弥次郎（直祐）と見えている。元家は、復帰が許されても有馬郡守護職を回復できないまま直祐らと並存していた時期があったと思われる。文正元年九月、いわゆる文正の政変の際、道衍は伊勢貞親らとともに京都から逃亡した⁽³⁴⁾。応仁元年正月に赦免されたのは、『大日本史料』の注記どおりこの道衍と考えられる。

『応仁記』によれば元家は東軍に属していたが、応仁二年には赤松惣領職の獲得を策動し、同年十一月、足利義視と通じたため上意によって誅殺された⁽³⁵⁾。その一年四か月後の文明二年（一四七〇）三月、元家の子息則秀が清水寺に霜台田を再寄進しており、有馬郡守護としての⁽³⁶⁾

在職が確認できる。したがって、則秀の守護職就任と元家の死は連動していると考えられ、元家は殺害された当時有馬郡守護であったと推察される。文正の政変から応仁の乱の勃発という事態のなかで、元家が守護に復活したと考えられるのである。

四 赤松則秀以後の有馬郡守護

前記のとおり、元家の跡をついだのは民部少輔則秀である。『有馬系図』に従えば、有馬郡守護職が元家から則秀へと再び嫡流に継承されたことになる。その後則秀の官途は、刑部大輔、出羽守と変わる。

さて、従来の守護表では則秀以後の守護として村則、村秀の二名をあげるのみだが、このほか、澄則・四郎・国秀を検出することができる。

則秀には慶寿丸という子息がいた。⁽³⁷⁾ 慶寿丸は、長じて又次郎と名乗った。⁽³⁸⁾ 実名は澄則である。則秀は、明応八年（一四九九）五月までに出家して耕雲軒と号した。⁽³⁹⁾ いっぽう澄則は、この年七月、清水寺に霜台田を寄進している。⁽⁴⁰⁾ 明応五年八月、則秀は澄則との連名で南御所料有馬郡上津畑の代官職を請負っているが、⁽⁴¹⁾ 請文の署名は赤松出羽守則秀である。したがって、則秀はそれ以降同八年五月以前に出家し、それにもなつて家督が澄則に譲られたものと考えられる。『鹿苑日録』文龜三年（一五〇三）七月一七日条にみえる「有馬刑部大夫（大輔）」は、則秀と官途が一致することから考えて澄則にまちがいはなく、この時点まで澄則の存在が確認される。

澄則の次に家督を継承したのは、又次郎村則である。⁽⁴²⁾ 又次郎の名は、永正一五年（一五一八）六月に上津畑代官職の補任を伝える幕府奉行人連署奉書⁽⁴³⁾が初見である。これに先立つ永正七年四月に、慶寿丸なる人物が同代官職に補任されている。⁽⁴⁴⁾ 澄則も慶寿丸から又次郎と改名しており、『三田市史』の注記どおり永正七年の慶寿丸は村則であり、澄則の嫡男と考えられる。村則は、大永六年（一五二六）一〇月に湯山阿弥陀堂の諸公事を免除しており、守護権の行使が認められる。⁽⁴⁵⁾ その後村則は、享祿四年（一五三一）三月に上津畑の公用銭を進納し、一〇月には村則の代官が上津畑代官職の請文を提出している。⁽⁴⁶⁾

次に、天文九年（一五四〇）一二月に霜台田を寄進した又次郎がいる。⁽⁴⁷⁾ 又次郎の花押は村則や次にみる村秀の花押と一致せず、両者とは

別個の人物とも考えられるが、戦国時代には花押の変更は珍しくなく、いずれかと同一人物の可能性も否定できない。

まず、天文九年までに村則の霜台田寄進状はなく、この又次郎が村則である可能性はある。しかし、村則は永正七年に慶寿丸名で文書を発給しており⁽⁴⁸⁾、幼名ながらすでに家督を継承していたものと推察される。したがって、これまでの例と比較しても天文九年段階での再寄進は遅すぎるように思われる。

赤松村秀も通称は又次郎であるが、天文一三年にはすでに民部少輔を名乗っている⁽⁴⁹⁾。同九年の又次郎が村秀と異なる人物であるとする、同一三年までの間に村秀への家督継承があり、さらに又次郎村秀が民部少輔村秀へと変わったことになる。ありえないことではないが、それよりも天文九年に又次郎を称していた村秀が、同一三年までに民部少輔の官途を与えられたとするほうが自然であろう。時間的な関係から判断して、天文九年の又次郎は村秀であると考えられるのである⁽⁵¹⁾。

村秀は、天文一十九年八月に名塩村と木下を教行寺に寄進し⁽⁵²⁾、弘治元年（一五五五）十一月には、清水寺にたいし霜台田の年貢進納を約している⁽⁵³⁾。これは村秀が現地に年貢進納を命じたことを清水寺に伝えたもので、従来の寄進状とは内容が異なる。おそらく、現地の抵抗により年貢収納が実現できない状況となり、清水寺があらためて村秀に願い出たのであろう。また、村秀には湯山阿弥陀堂の諸公事を免除した形跡もある⁽⁵⁴⁾。さらに、上津畑の公用銭進納にも関与し、未進に関する三好長慶からの書状に返書を送っている⁽⁵⁵⁾。村秀の官途は弘治元年段階でも民部少輔であるから、天文二十一年三月及び永禄二年（一五五九）五月に幕府奉公衆としてみえる有馬民部少輔⁽⁵⁷⁾は村秀であろう。

翌永禄三年正月、有馬四郎なるものが有馬郡内上荘の代官として現われる⁽⁵⁸⁾。四郎は翌年一月初めて幕府に出仕し、式部少輔に任じられた⁽⁵⁹⁾。永禄五年正月にも内上荘の代官であることを示す史料があり、その後姿を消す⁽⁶⁰⁾。

四郎は、年未詳ながら湯山阿弥陀堂に諸公事免除を確認する書状を送っている⁽⁶¹⁾。この書状は馬廻衆による強要という具体的な事態に対して出されており、村則や次にみる国秀（おそらく村秀も）の判物による代替わり安堵と異なるとはいえ、四郎が領内寺社の諸公事免除の権限を保持していることは認められる。通称から判断して四郎が村秀の嫡子ではないことはほぼ確実なのだが、村秀に永禄二年五月以降の所見がなく、四郎が永禄四年の初出仕のうちに「代始御礼」を献呈しており、湯山阿弥陀堂への強要も代替わりを理由とするものであったことを勘案すると、経緯は不明ながら四郎は村秀に代わって当主となったものと考えられる。

〈有馬郡守護表〉

氏 名	通称・官途・法名等	在 職 期 間	備 考
赤松義祐	出羽守(入道)	←応永元年5月—応永28年9月	応永28年9月26日殺害
赤松教実	兵部少輔	応永28年9月—宝徳2年1月	宝徳2年1月21日没
赤松元家	民部少輔・上総介	宝徳2年1月—康正元年12月	康正元年12月13日遁世
赤松 某	道衍・治部少輔(入道)	康正元年12月—寛正6年8月→	
赤松直祐	弥次郎	←文正元年2月—同年閏2月→	
赤松元家	上総介	←応仁2年11月	応仁2年11月10日殺害
赤松則秀	民部少輔・刑部大輔・ 出羽守・耕雲軒	応仁2年11月—明応5年8月→	明応8年5月17日以前出家
赤松澄則	慶寿丸・又次郎・ 刑部大輔	←明応8年5月—文亀3年7月→	
赤松村則	慶寿丸・又次郎	←永正7年4月—享祿4年10月→	
赤松村秀	又次郎・民部少輔	←天文9年12月—永祿2年5月→	
赤松 某	四郎・式部少輔	←永祿3年1月—永祿5年1月→	
赤松国秀	出羽守	←永祿11年10月—天正2年閏11月→	

有馬郡守護について

ついで、永祿十一年一〇月、清水寺にたいし霜台田の年貢進納を約した有馬出羽守国秀がいる。⁽⁶²⁾ 元亀二年(一五七一)一二月には村秀の判形に任せて湯山阿弥陀堂の諸公事を免除しており、自らを村秀の後継者として位置づけていることが判明する。国秀は村秀同様上津畑に関与し、天正二年(一五七四)閏十一月、織田信長方へ相違なき旨回答している。⁽⁶⁴⁾ また、内上荘の代官でもあり、公用銭に関して恵聖院に送った文書が残っている。⁽⁶⁵⁾

このように、村秀、四郎、国秀はいずれも霜台田の保証、あるいは湯山阿弥陀堂の諸公事免除をおこなっており、有馬郡内において村則までの守護と同様の権限を行使していたことがわかる。これら三名すべてを守護と呼ぶことには疑問があるかもしれないが、ここではこのような意味において守護と呼んでおくことにする。

五 赤松有馬氏の嫡流と有馬氏系図

以上、義祐以降国秀までの有馬郡守護についてみてきた。それを整理したのが別表である。在職期間欄に記した年月は必ずしも守護としての在職徴証の時期とは限らず、当主としての存在が推認される時点を示したものもある。また、前任者と後任者が父子関係にあり、父が死没時まで在職していたと考えられる場合には、その死没時を後任者の任初とした。したがって、これは推定しうる最大の在職期間ということになる。さて、『寛永諸家系図伝』や『寛政重修諸家譜』所収の久留米有馬氏系図では、赤松義祐から久留米有馬氏初代豊氏に至る系譜は左記のようになっており(以下、これを

有馬氏系図と呼ぶ)、『続群書類従』所収の『有馬系図』も同様である。

義祐——持家——元家——則秀——澄則——則景——重則——則頼——豊氏

これを見ると、別表の義祐から澄則までの七名のうち別系統と思われる道衍・直祐父子を除く五名は、持家を教実と改めれば、この系図と適合的に理解できる。ところが、澄則の次代以降は別表とまったく異なっている。

前述のとおり、澄則は確実に則秀の子息であり、村則・村秀は澄則同様又次郎を名乗っているのであるから、かれらが則秀・澄則に続く嫡系であることは疑問の余地がない。また、国秀が又次郎を名乗った明証はないが、⁽⁶⁶⁾実名に村秀の「秀」を含んでいること、官途が澄則の刑部大輔、村秀の民部少輔と同様に則秀の官途であった出羽守であることから、村秀の嫡男と判断される。つまり、村則・村秀・国秀が澄則に続く赤松有馬氏の嫡流なのである。したがって、久留米有馬氏につながる一流は、有馬氏系図に従えば澄則の子息則景から始まる傍系であったということになる。なお、有馬四郎がこれらの系譜とどのような関係になるのかは不明というほかはない。

管見のかぎり則景に関する史料は確認できないが、次代の重則にあたると考えられる人物に有馬源二郎重則がいる。源二郎重則は、永禄六年(一五六三)段階で將軍足利義輝の近習であり、⁽⁶⁷⁾同八年五月、松永久秀らの襲撃をうけた義輝とともに討死した。⁽⁶⁸⁾有馬氏系図の重則は官途が筑後守であり、若干の不安定要素は残るものの、これが源二郎重則であることはまちがいあるまい。時期的な関係からみれば永禄六年以降、重則が四郎に代わる存在であった可能性も想定しうるが、いまのところそれを推定させる具体的な材料はない。有馬源二郎の名は、これより先天文九年(一五四〇)に所見がある。⁽⁶⁹⁾同二年、二三年には三好長慶方として活動しており、⁽⁷⁰⁾赤松有馬氏一族において重要な存在であったことがうかがえる。このころの赤松有馬氏当主は村秀であるが、嫡流の当主であることと主導的な勢力であることとは必ずしも一致せず、庶流の重則は村秀とは別に独自の勢力を形成していたものと思われる。⁽⁷¹⁾

この重則の跡を継いだ則頼・豊氏が豊臣秀吉、徳川家康につかえ、元和六年(一六二〇)、豊氏が久留米藩主となって久留米有馬氏が成立する。本来久留米有馬氏は赤松有馬氏の傍流なのだが、久留米有馬氏の由来を示すことを目的とする有馬氏系図は、村則以降の嫡系を記載せず、自流だけを義祐から澄則に至る嫡流の延長に位置づけたのである。⁽⁷²⁾

おわりに

中世における一武家勢力としての赤松有馬氏を考えた場合、有馬郡守護はその性格の一部にすぎない。赤松有馬氏の当主は歴代近習として將軍に仕え、元家が義政の政治に容喙する「三魔」のひとりに数えあげられたことは有名である。また、元家や則秀には、赤松惣領職への関心もみられる。⁽⁷³⁾さらに、文明一六年（一四八四）に山名氏と通じて有馬郡に攻め込んだ有馬右馬助⁽⁷⁴⁾をはじめ、先に述べた有馬四郎や有馬源二郎などの存在があり、一族相互や被官との争いもみられる。⁽⁷⁵⁾こうした武家勢力としての赤松有馬氏の全容解明は今後の課題であるが、この小論がこれからの研究に多少とも役立てば幸いである。

注

- (1) 今谷明「摂津における細川氏の守護領国」（『兵庫史学』六八 一九七八年）。のち同著『守護領国支配機構の研究』（一九八六年 法政大学出版局）に再録。以下、今谷氏の見解は本論文による。なお、次にみる辞典類のほか『大阪府史』第四卷（一九八一年）の「摂河泉守護表（室町・戦国期）」も有馬郡守護を載せるが、今谷氏前掲論文と基本的に同一である。
- (2) 高田久義『有馬郡主 赤松有馬氏年譜』（一九九七年 自費出版）。
- (3) 『三田市史』第三卷 古代・中世資料（二〇〇〇年）。
- (4) 拙稿「解説」（特別展図録『古文書が語る播磨の中世』一九九四年 兵庫県立歴史博物館）。
- (5) 『実相院文書』嘉慶元年二月二十九日付管領斯波義将施行状案。本文にあげた諸辞典が、赤松義則の在職を確認しうる最終時期を嘉慶元年二月、または同二年としているのは、この文書によると思われる。
- (6) 佐藤進一『室町幕府守護制度の研究』上（一九六七年 東京大学出版会）。
- (7) 山崎敏昭「三田城」（前掲『三田市史』）。
- (8) 『清水寺文書』応永一六年閏三月二〇日付有馬義祐寺領寄進状案。
- (9) 『同』永徳三年九月四日付赤松義則寺領寄進状案。
- (10) 『看聞日記』応永二八年九月二六日条。
- (11) 『放生会記』応永一九年八月一五日条。

- (12) 『醍醐寺文書』 嘉吉二年三月二〇日付有馬教実請文案。
- (13) 前注文書のほか、『康富記』 嘉吉二年一〇月条所収同年同月付赤松兵部少輔教実言上状。なお、『永享以来御番帳』にも「有馬兵部少輔教実」とみえる。
- (14) 『建内記』 嘉吉元年七月一日条、『東寺執行日記』 同日条。
- (15) 『八坂神社文書』 嘉吉元年二月一日付室町幕府奉行人連署奉書案。
- (16) 注(13) 参照。
- (17) 『御前落居記録』 永享三年五月一六日付室町幕府裁許状写。
- (18) 『東寺執行日記』 文安二年三月二四日条。
- (19) 『同』 文安二年四月四日条。
- (20) 『康富記』 宝徳二年正月二一日条。
- (21) 『清水寺文書』 享徳元年七月二九日付有馬元家寺領寄進状。
- (22) 『斎藤基恒日記』 康正元年二月二九日条。
- (23) 『清水寺文書』 康正二年四月八日付有馬道衍寺領寄進状。
- (24) 『続群書類従』 第五輯下所収『赤松系図』の一本。
- (25) 注(22)。
- (26) 『蔭涼軒日録』 寛正四年二月二九日条。同日条の赤松治部少輔が道衍であることは同月二五日条参照。
- (27) 同前。「赤松」治部少輔息弥次郎とある。
- (28) 今谷前掲論文。ただし、今谷氏は通称を孫次郎とする。
- (29) 『新版日本史辞典』が「豊則カ」とするのは、今谷氏が孫(弥)次郎の比定候補の一人として『赤松系図』(『大日本史料』 応仁二年十一月一日条所収)の豊則をあげているのに従ったものと思われる。豊則は『赤松系図』では元家の子となっているが、『有馬系図』には元家の弟に「豊則 右馬助」がみえる。
- 赤松有馬氏に豊則を名乗る人物がいたことは、『経覚私要鈔』 宝徳元年八月二八日条に「赤松有間小三郎豊則」とあることからあきらかである。
- 『斎藤基恒日記』によれば、おなじころ元家に有馬小三郎という弟がいるから(康正元年五月一二日条)、豊則は元家の弟である。同記によれば、小三郎は赤松則尚の乱に加わり、康正元年五月、則尚とともに敗死したという(同前)。ただし、同記の前年十一月三日条には元家弟の名が小次郎とあり、若干不安定な要素が残るものの、これは後に正しい名を知った可能性が高く、豊則は康正元年に死亡したと考えるべきである。
- (30) 『大乘院寺社雑事記』 文正二年正月一九日条。
- (31) 『後法興院記』 応仁二年十一月一日条。
- (32) 二木謙一「室町幕府御供衆」(同著『中世武家儀礼の研究』 一九八五年 吉川弘文館)。

- (33) 『蔭涼軒日録』寛正六年九月一八日条。
- (34) 『応仁記』
- (35) 注(31)、『大乘院寺社雜事記』応仁二年十一月一七日条。
- (36) 『清水寺文書』文明二年三月五日付有馬則秀寺領寄進状。
- (37) 『蜷川家文書』(文明一六年)二月五日付浦上則宗等連署書状案に「刑部大輔(則秀)子慶寿丸」とある。
- (38) 『蔭涼軒日録』延徳三年正月二三日条に「有馬出羽守則秀公息又次郎」とある。
- (39) 『鹿苑日録』明応八年五月一七日条。同年八月二六日条も参照。
- (40) 『清水寺文書』明応八年七月五日付有馬澄則寺領寄進状。
- (41) 『宝鏡寺文書』明応五年八月五日付有馬則秀・有馬又次郎連署上津畑代官職請文。
- (42) 『日本歴史事典』の守護表で則秀の次に村秀とあるのは村則の誤りである。また、村則の父は則秀ではなく澄則と考えられる。
- (43) 『宝鏡寺文書』永正一五年六月八日付室町幕府奉行入連署奉書。
- (44) 『同』永正七年四月五日付有馬慶寿丸上津畑代官職請文。
- (45) 今谷前掲論文。
- (46) 『宝鏡寺文書』享祿四年三月朔日付上津畑公用銭請取状、同年一〇月七日付有馬村則代青海野忠重等連署上津畑代官職請文。なお、前掲『三田市史』二五八頁参照。
- (47) 『清水寺文書』天文九年二月二〇日付有馬又次郎寺領寄進状。
- (48) 注(44)
- (49) 『宝鏡寺文書』(京都大学文学部古文書室架蔵写真帳)年月日未詳赤松又次郎村秀書状など。
- (50) 『同』(天文一三年)赤松村秀書状。
- (51) 村則の所見とした注(46)の二通の文書で有馬氏当主を示すのは「又次郎」、「有馬」のみであって、村則と明示されているわけではない。しかし、これを村秀とすると、霜台田寄進が家督繼承から少なくとも九年後ということになるため、村則と判断した。なお、注(4)拙稿で天文九年の又次郎を村則・村秀と異なる人物としたが、本文のように訂正したい。
- (52) 『教行寺文書』天文一九年八月一六日付有馬村秀寄進状。
- (53) 『清水寺文書』弘治元年一月二九日付有馬村秀書状。
- (54) 『善福寺文書』元龜二年二月二日付有馬国秀安堵状写に、「任村秀判形旨」とある。
- (55) 『宝鏡寺文書』年末詳四月一〇日付有馬村秀書状。
- (56) 注(53)。
- (57) 『言繼卿記』天文二二年三月二五日条、永祿二年五月一日条。ところで、同記には有馬民部少輔と並行して天文二二年六月二九日条、弘治元年正

月一〇日条、永禄二年四月一日条に奉公衆として有馬治部少輔の名がみえる。『後鑑』所収の『伊勢貞助記』によれば、永禄二年三月三日と五月五日に有馬氏が幕府に出仕している。官途が異なる以上当時二人の有馬氏の奉公衆がいたはずであるが、『伊勢貞助記』は「有馬殿」と記すだけで特定しようとはしていない。『言継卿記』の治部少輔は民部少輔の誤りとも考えられるが、今谷明氏が紹介された永禄三・四年成立の結番交名にも有馬治部少輔がみえる（今谷明『東山殿時代大名外様附』について、同著『室町幕府解体過程の研究』一九八五年 岩波書店）。両者の関係については後考を期したい。

(58) 『宝鏡寺文書』永禄三年正月二〇月付恵聖院雑掌道意公用銭請取状案。

(59) 『後鑑』永禄四年一月二八日条所収『伊勢貞助記』。

(60) 『宝鏡寺文書』永禄五年正月一七日付恵聖院雑掌道意公用銭請取状案。

(61) 『善福寺文書』年未詳二月二七日付有馬四郎書状。

(62) 『清水寺文書』永禄十一年一〇月一四日付有馬国秀書状。官途については、『宝鏡寺文書』（京都大学文学部古文書室架蔵写真帳）の（天正二年）有馬国秀書状（仮名書）などに「ありま出わのかみ」とある。なお、『尼門跡寺院大聖寺・宝鏡寺・靈鑑寺古文書目録』（一九八四年 京都府教育委員会）に「有馬宗秀」とあるのは「有馬国秀」の誤りである。

(63) 注(54)

(64) 『宝鏡寺文書』（天正二年）閏一月二一日付有馬国秀書状。

(65) 注(62)（天正二年）有馬国秀書状ほか。

(66) 『善福寺文書』天正七年四月五日付羽柴秀吉寺領宛行状案は、「有（馬）又治郎殿」関係の寺領を当知行により湯山阿弥陀堂に安堵したものであるが、この又治郎は国秀の可能性もある。

(67) 『群書類従』第二九輯所収の『永禄六年諸役人附』には「有馬源次郎」とのみあるが、『後鑑』永禄六年五月条所収『光源院殿御代当参衆并足輕以下衆覚』には「有馬源次郎重則」とみえる。この史料については、長節子「所謂『永禄六年諸役人付』について」（『史学文学』四巻一号 一九六二年）参照。

(68) 『言継卿記』永禄八年五月一九日条、『足利季世記』。

(69) 『大館常興日記』天文九年二月二〇日条。

(70) 『足利季世記』。

(71) このほか、一六世紀と思われるが、名塩寺に公事人足を賦課した有馬播磨守則綱なる人物もいる（『教行寺文書』年未詳五月付有馬則綱書状）。有馬郡内の支配に関与していることはあきらかだが、いまのところその性格はあきらかにできない。

(72) たまたま目にしたところでは、『上月文書』（徳島県文書館寄託）の赤松系図が「義祐―元家―則秀―澄則―村則―村秀」としている。教実（持家）を欠き、国秀もないが、村則・村秀を記載した系図も存在するのであり、有馬氏系図の意図はこれによってもあきらかである。

(73) 元家については前述。則秀については注(37)文書。この文書は浦上則宗以下赤松氏の有力被官が赤松政則に代えて則秀の子息慶寿丸を赤松惣

有馬郡守護について

領職にむかえようとするものであり、当然則秀の了解があつたはずである。

- (74) 『大乘院寺社雜事記』文明一六年三月八日条。なお、『大日本史料』は右馬助に豊則をあててゐるが、当時すでに死亡している(注(29)参照)。『応仁記』によれば、有馬右馬助は足利義視の御供衆であつた。山名氏との関係はそれ以来であらう。いっぽう、文明四年には赤松則秀が赤松政則の指揮下に入り、東軍に属していた(『上月文書』(文明四年)八月二五日付赤松政則書状)。応仁・文明の乱中、乱後においても一族内に対立があつたことがうかがわれる。なお、高田氏は右馬助を直祐に比定している(前掲書)。

- (75) 前注および『蔭涼軒日録』延徳三年正月二三日条、『晴富宿祢記』明応四年九月二八日条。